

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2005年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	地理学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学研究科・教授	豊田 由貴夫 印	
自然・人文の別	自然 ・ <u>人文</u>	個人・共同の別	<u>個人</u> ・ 共同 1名
研究課題名	インド・テキスタイル研究と工芸概念との関わり―「サンバルプリ」を事例として		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・地理学専攻 ・博士課程後期課程3年	佐藤 誠 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2005年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

文化人類学におけるいわゆる工芸を対象とした研究と工芸研究から、工芸概念が指し示す範疇の整理とその問題点を抽出する一方、現存のインド・テキスタイルに関する著作群からその記述方法を抽出することによって、インド・テキスタイル研究に見られるまなざしのあり方を指摘する。こうした作業過程において、これらに見られる共通の認識枠組みを捉え、人類学批判において行われた「近代」と「伝統」という二項対立的認識枠組みとの共通性を指摘する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[テキスタイル] [工芸] [物質文化研究]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

文化人類学の物質文化研究において、いわゆる工芸と呼ばれるモノを対象とした研究は多い。しかし、工芸の概念そのものを対象とした研究は少ない。本研究は「現代における工芸とその生産者に関する人類学的研究ーインド・オリッサ州の布『サンバルプリ』を事例として」(予定)と題する博士提出論文の一部として、工芸概念の整理とそこに見られる問題点の提起、および工芸概念とインド・テキスタイル研究との関わりを整理するものである。本研究では、文化人類学的な物質文化研究におけるいわゆる工芸を対象とした研究と工芸を主題とした研究の双方から、工芸の概念に関する問題点を抽出し、インド・テキスタイル研究に見出される対象に対するまなざしとの関連を示す。

現代において工芸と呼ばれるモノの主要な要素として、手づくりが挙げられる。しかし、単に手づくりによってつくられたモノのすべてが必ずしも工芸とはされない。宇宙開発などに用いられる一部の部品は現代においても手を用いてつくられるが、これが工芸とみなされることはない。ここに見られる「手づくり」とはどのような意味であろうか。「手づくり」とは、「機械」を用いてつくられたモノとの対比において捉えられている。この「機械」とは、織りの技術において機械と見なしうる織機が用いられ、ときに工芸の範疇として捉えられることから分かるように、単なる機構を備えたモノとしての機械を指し示していない。ここでいわれる「機械」とは近代以降の状況を象徴的に示している。この対比において、「手づくり」とは近代以前の状況を象徴的に示しており、「伝統」を象徴する。

また、工芸は「過去から連続した技術や美意識」としてみられる。しかし、今日工芸と呼ばれるモノを見たとき、必ずしも「過去から連続した技術や美意識」を体現するモノとしてのみ位置づけることはできない。「過去から連続した技術や美意識」と見なされるモノ全てが、現在工芸と呼ばれているわけではないし、逆に「過去から連続した技術や美意識」と見なされないモノでも工芸と呼ばれることはある。

これまでの人文・社会科学的な研究において、「伝統」は単なる「過去からの連続」ではなく、ある集団のアイデンティティと深く関連し、恣意的な操作が加えられた概念と捉えられる。このような「伝統」と同様に、工芸もある集団のアイデンティティと深く関連し、何が工芸と呼ばれ、何が工芸と呼ばれないかという観点において恣意的な操作が加えられた概念であるとする事ができよう。

近年の人類学的な研究において、多くの研究者が「近代」と「伝統」という二項対立的な認識を暗黙のうちに前提とし、再生産してきたことへの批判が多く出された。これを踏まえ、研究者がこうした二項対立的な固定的認識を見出したとき、工芸という概念に見られる二項対立的な認識を明らかにし、モノを類別する認識枠組みを捉え直すことができる。ここにおいて工芸という対象を極めて現代的な認識を含んだ一つの価値として捉え直すことができるようになる。

研究成果の概要 つづき

こうした二項対立的な認識枠組みは、テキスタイル研究もその域外にあるわけではない。田口は、インドネシア・テキスタイル研究のはじまりを以下のように捉える(田口理恵 2002 『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』風響社)。20世紀初頭、オランダにおいて当時オランダ領インドであったインドネシア各地の様々な布製品が西欧世界に対してエキゾチックな布として紹介されるようになった。博覧会等において織機の形態差、素材や染料、装飾技法、モチーフなどの項目ごとに当該地域内での分布状況が明らかにされ、織りに関する通文化的比較研究の枠組みが体系化されていった。これらの項目はインドネシアの基層文化を表しているともみなされ、進化論的歴史観によって文明化度を測る指標となった。こうした視点は現在のカタログ解説においても踏襲されているという。

現在インドにおいて入手できるテキスタイル研究の多くを見ても、これと同様のことが見られる。テキスタイル研究によって関心を得る観点は、主として 1. 布の形状 2. モチーフ 3. 製布技術であり、これらの特徴が地域的な分布によって示され、「ある地域に特徴的な布」として描かれる。現代のインドでは、こうした研究の対象となるべきテキスタイルにおいていわゆる機械によって大量に生産される布も多数存在するが、ここではそれらは取り上げられることはなく、「ある地域に特徴的である」という点によって「ある普遍的な均質化」をもたらした近代より以前の状況が示される。また、「ある地域に特徴的である」との理解から、テキスタイル研究で対象となる布とそうではない布の相対的位置関係、それらの販売形態、購入のされ方等、現代の状況を指し示すような項目は記述されることがない。

このように、工芸という概念においては「手づくり」と「機械生産」との対比、テキスタイル研究においては「ある地域に特徴的であるということ」と「ある普遍的な均質化」との対比が、それぞれ「伝統」と「近代」という二項対立的認識に裏付けられる。伝統的に行われてきた人類学的調査における二項対立的認識枠組みとの共通性が見出される。典型的な二項対立的枠組みによる認識方法の批判を受けた人類学が現代において見られる二項対立的な概念をどのように描くことができるのか、あるいは研究者の側の認識枠組みに対する批判だけでなく、工芸やテキスタイルなどのように、より一般的に用いられる概念において見られる認識枠組みは現代社会においてどのような価値として描かれ得るのかといった問題設定が今度の課題となろう。